わたしの意見

岡山県中学校弁論大会から

①

第二十回岡山県中学校弁論大会（岡山県中学校国語教育研究会、山陽新聞社主催）がこのほど、岡山市幸町、西川アイプラザ大ホールで行われた。今年は同県内十八地区代表の二十三人が出場。学校や日常生活の中で感じた現代社会の問題、自分自身の生き方などを力いっぱい発表した。論旨、態度、感銘度に優れ、上位四賞に入賞した四人の弁論内容（要旨）を紹介する。

県中学校国語教育研究会長賞

人間らしく生きるために

岡山・芳泉中2年　荒磯　真紀さん

「五百七十円あれば一人の栄養失調の子供が救えます」。こう書かれた本に出会ったのは、文化祭でクラスの展示を何にしようかと考えていた時でした。

「国境なき医師団」という本の中には、戦乱や飢餓、疫病などで苦しむ、カンボジア、ルワンダ、ケニア、リベリアなどの人々の様子が書かれてありました。そして、それらの国々の難民キャンプで活躍するMSFという医師団があることを知りました。

「五百七十円で人の命が助かるなら、私たちのクラスでも何かできないかなあ」と話し合っていた時、先生が、岡山にも、市内にAMDA（アジア医師連絡協議会）の本部があると紹介してくれました。AMDAというのは、一九八四年に設立された、アジアでの医療活動を中心としたものです。この身近なボランティアに私たちもささやかでも参加できないかと考え、さっそくAMDAの本部に出かけてみました。

そこは、個人病院の地下にあり、数台のコンピューターと電話だけの小さな事務所でした。ここから、世界各国にむけて医師団が派遣されているのかとびっくりしました。

私たちの話を丁寧に聞いてくれて「どこの国でもよいのですが、一つの国についてしっかり勉強してください。そして、その国にむけて募金をしてもらえれば、その国の救援活動に利用させてもらいます」と、言われました。

そこで、私たちはツチ族とフツ族の闘争が続く、ルワンダについて調べることにしました。ルワンダ難民は百五十万人以上といわれています。一日に飢えや病気で、二千人から三千人の死体が道路に並び、毎朝、回収されるという悲惨な状況には声も出ません。人間がまるでごみのように集められ焼かれる―人間らしい死をむかえることすら許されない難民キャンプの人々。写真や資料をまとめていくうちに、一円でも多くのお金を集めたいという気持ちが強くなりました。

集まったお金は結局、二万八千四百八十七円。これでほぼ四十人の子供たちの命が救えると思うと、私たちは大満足でした。しかし、私は二万いくらという金額をあらためてみたとき、少しどきっとしました。

それは、ある日の給食だよりに書いてあったことを思い出したからです。残量の多い日は金額にして八万円以上に上る日があるそうです。八万円以上の食べ物がごみとして処理される国がある。その一方で、たった五百七十円で人の命が救える。それでは私たちは、毎日百人以上の命の糧を捨てていることになるのです。そうしてみると、自分たちの集めた三万円たらずのお金が色あせてみえました。

そして、あらためて戦乱の続くルワンダの人々の生活を見直してみると、人間らしく生きるためには、多くの支えが必要だということが分かります。

私たちの命は、私たちのまわりの多くの人々、多くの物資によって支えられているのです。今回のルワンダへの募金は、私たちが忘れかけていた、この大切なことに気づかせてくれました。